慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	兪吉濬のアメリカ留学と近代地理学の受容
Sub Title	Yu Kilchun's acceptance of modern geography during the time of study in America
Author	徐, 明一(Seo, Myongil) 姜, 兌玧(Kang, Taeyoun)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2020
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.36, (2019.) ,p.73- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 近代日本と留学
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20190000-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十六巻（二〇一九年度）
特集　近代日本と留学

兪吉濬のアメリカ留学と近代地理学の受容

徐　明一
姜　兌玧　訳

一　はじめに

留学は、書籍の流入や外国人の招聘と共に、朝鮮が近代文明を受容する最も重要な経路の一つであった。ただ、開港以後の朝鮮人における海外留学は、隣国日本に集中していたのが事実である。地球を半周して西洋へ向かうことが容易でなかった時代状況の中で、日本は「文明の空気」を吸入できる最も現実的な選択肢であったからだ。韓国の近代思想を、日本を通した西洋文明の間接受容、つまり「重訳」の結果として理解する視座は、このような歴史的脈絡を反映したものである。(1) しかし、一八八〇年代の朝鮮には、日本を経由せず西洋の

学問と制度を直接受容しようとする動きが、明らかに存在していた。朝鮮は西欧列強の中でアメリカと初めて修交して以来、アメリカ人教師を招聘して、英語学校である「育英公院」を設立し、米軍将校出身の軍事教官を採用して士官学校の「鍊武公院」を設立する等、対米関係を足がかりにして近代化政策を推進していた。[2] この中で留学生の派遣は、朝鮮政府が積極的に推進することになる対米外交の信号ラッパのようなものであった。日本との条約締結すら伝統的友好関係の復元（旧好重修）[3] と規定するほど、西洋文化の受容には硬直的であった朝鮮が、「夷狄」に過ぎなかったアメリカに留学生を派遣することは画期的な事件であった。

最初の米国留学生という重責を背負った人物は、一八八一年慶應義塾に入学して朝鮮最初の日本留学生になった兪吉濬（一八五六～一九一四）であった。彼は「朝士視察団」の一員として渡日して一年半修学し、一八八三年には「報聘使」の随行員として米国に行き、約二年間余、近代文明を体験した。[4] 二度の海外留学を通して日本語と英語両方を駆使することができた兪吉濬は、朝鮮の近代留学を代表する人物に間違いない。なにより彼以後渡米した留学生の大半が「亡命者」であったのとは異なり、兪吉濬は政府の支援を受ける官費留学生であり、彼の留学は西欧文明を受容しようとする朝鮮政府の公式的な立場を代弁するとも言える。しかし、最初の留学生という象徴的存在であるにも拘わらず、兪吉濬がアメリカで何を見て、聞いて、学習したのかは明らかにされていない部分が多い。留学時代の記録はエドワード・モース（Edward S. Morse, 1838–1925）に送った二〇通余りの手紙しかないため、後述するように米国に一人残されてからダンマーアカデミー（Governor Dummer Academy）に入学するまでの語学習得課程や、ダンマーでの教育内容、さらにダンマーを去って帰国するまでの足跡等は未だベールに包まれている。「朝鮮最初の米国留学生」という慣用的修辞にも拘わらず、米国留学の影響が蓋然性の形でしか言及されなかったのはこのためである。兪吉濬がアメリカでは正規の

教育課程に入学して、日本留学より長い期間滞在していた事実に注目すると、アメリカ留学が彼の思想に大きく影響を及ぼしたと推定することは難しくない。日本ではなく、アメリカから学んだものは何か。留学の意義を把握するためには、留学生活の全貌がより明らかにならなければならない。

こういった状況の中で、最近兪吉濬がダンマーで参考にした教科書の詳細が明らかになり、彼のアメリカ留学理解にあたって新たな契機が訪れた。[5] 彼はダンマーでデイビッド・ウォーレン（David Warren）が著した *An Elementary Treatise on Physical Geography* という教科書を使って近代地理学を学んでいた。『西遊見聞』の序論にあたる「一編」と「二編」は自分が留学していたダンマーの地理教科書を翻訳したものであった。兪吉濬が参考にした英文著作が初めて明らかになったため、彼が「言語の障壁」を超えて何を学んだか、また新たに習得した知識をどれほど理解していたかが把握できるようになった。従って、本稿では兪吉濬が英語を学び始めてから朝鮮に帰ってくるまでの約二年間の留学生活を再検討した上で、ダンマーで行われた地理教育を分析し、アメリカ留学が彼の思想に及ぼした影響について確認作業を試みる。

二　セイラムでの英語学習とモースとの知的交流

一八八三年七月、朝鮮は「朝美修好通商条約」の締結による批准書交換のため、米国に外交使節を派遣することを決定した。初代アメリカ公使フット（Lucius H. Foote, 1826–1913）の赴任に対する答訪の形式をとっていたため一般的に「報聘使」と呼ばれるこの使節団は、西洋に派遣された朝鮮最初の外交使節であった。[6] 正使閔泳翊（一八六〇～一九一四）を筆頭に、二〇代と三〇代前半の若い官僚で構成された報聘使は、三か月間ア

メリカに滞在しながら様々な近代文物を視察した。使節団の公式任務が終わる頃、報聘使を率いた閔泳翊は随行員であった兪吉濬に、帰国せずアメリカに残って学ぶことを指示した[7]。報聘使の中には後日メリーランド農科大学を卒業することになる邊燧（一八六一～一八九一）もいたが[8]、閔泳翊は自身の幼年時代の同窓（洛山書齋）であり、日本留学の際に卓越した能力を発揮した兪吉濬をアメリカ留学の適任者と判断した。

兪吉濬のアメリカ留学は、報聘使を派遣する時から計画されていたと思われる[9]。一八八一年に日本に視察団（朝士視察団）を派遣した際にも、随行員の一部を帰国させずに慶應義塾や同人社等に入学させた前例があったため、兪吉濬は報聘使の随行員に選ばれた時からアメリカ留学の可能性を予想していたであろう。閔泳翊がアメリカ政府に留学生派遣計画を伝え協力を要請した後[10]、現地で決定された事項は留学の時期や場所のような具体的な問題であった。

この一連の流れの中で、報聘使に参与していたアメリカ人参賛官パーシヴァル・ローウェル（Percival Lowell）は、兪吉濬のアメリカ留学を指導する人物として、東京大学教授を務めたピーボディ科学アカデミー（The Peabody Academy of Science）のエドワード・モースを紹介した。モースは日本で兪吉濬と対面したことがあり[11]、またある程度日本語が話せたため、英語が話せない兪吉濬とも意思疎通ができた。一八八三年一〇月初めになると、兪吉濬は現地のメディアとのインタビューで「勉強を終えた時、朝鮮の方角を眺め笑うことだろう」[12]と述べ、自身の留学について知らせた。インタビュー後に、彼がセイラム（Salem）に残ってモースの指導を受けるという具体的な計画が報道された[13]ことを見ると、遅くとも一八八三年一〇月初めにはアメリカ留学に必要な事前準備が整ったことが分かる[14]。

兪吉濬は自身の留学生活を指導する「碧眼の師匠」が決まると、直ぐに結い上げた髷を切り、洋服に着替

えた。[15] 日本留学時にも髷を切らなかった彼が、アメリカ留学を前にして果敢に髪を切ることができたのは、政界の実力者であった閔泳翊から長期間の留学を約束されたからであろう。現地のメディアも、彼が英語を学んだあと法学を勉強する予定であるとか、学業期間が五年に及ぶと報道するほど、[16] 彼のアメリカ滞在は短期間の視察とは明確に区分されていた。とうとう一八八三年一一月八日、報聘使一行と別れた兪吉濬はモースのいるセイラムに到着し、[17] 朝鮮最初のアメリカ留学生としての第一歩を踏み出した。セイラムに到着した直後、自身が着ていた服飾一切をピーボディに寄贈したことを考えると、[18] 何年かかるか分からない留学生活における彼の覚悟が汲み取れる。

兪吉濬は報聘使派遣前から、英語を学習していたと考えられる。彼はアメリカに向かう際、英単語を書いたノートを携帯しており、[19] セイラムへ出発する前ニューヨークで道に迷った時にも、現地の警察に道を聞いてホテルに戻ることができた。[20] しかしながら留学生活を始める頃の彼の英語能力は、幾つかの単語と短い文章を理解するくらいであった。従ってアメリカに滞在しながら近代的学問を学習するためには、英語を学ぶことが最優先の課題であった。兪吉濬の指導を任されていたモースも、高校を経て大学に進学するという体系的な留学を計画していたが、アメリカで正規教育課程を履修するための第一歩は、やはり個人教師（private tutor）による語学学習が先行するべきであるとみていた。[21] モースは最初にハーバード大学を卒業したばかりのホセ・アントニオ・マチャド（Jose Antonio Machado）という人物に兪吉濬の英語教習を任せた。兪吉濬の最初の英語教師となったマチャドは、キューバ（Cuba）生まれの移民で、セイラムで高校を卒業して一八七九年ハーバードに入学し、一八八三年一一月から一二月まで約二か月間兪吉濬に英語を教えた。[22] 兪吉濬への英語教習はマチャドにとっても興味深い経験であったようで、彼は自身が教えた朝鮮人学生の名前を「Yu Kil Chun」と正

確に記憶していた。

マチャドの英語教習は長く続かなかったが、兪吉濬はマチャドとの学習が終わった後にも個人教授を通して英語の習得に力を注いだと考えられる。おそらくモースの秘書であったマーガレット・ブルックス（Margarette Ward Brooks）やモースの娘エディス（Edith Owen Morse）等が兪吉濬の英語学習を手伝ったと推定される。[23] ブルックスはモースの秘書と知られているが、数年の間モースの進化論講座が含まれたピーボディの夏期生物学教室（Summer School of Biology）に参加し、若き生物学徒としてモースの研究を手伝った助手でもあった。[24] エディスも年（一八六四年生）は若かったが、父の仕事を手伝っていたため、[25] 同じ家に住んでいた兪吉濬の英語学習を手伝った可能性が高い。

兪吉濬は一〇か月程の個人教授を通じて、英語で手紙が書ける程度のレベルとなり、モースも兪吉濬の英語力を高く評価した。例えばモースは、一八八四年九月 *SCIENCE* 誌に掲載された朝鮮に関する論文を読んで幾つかの誤謬を指摘したが、彼は自身の論評が「英語を上手に駆使する」兪吉濬の助言によるものであることに言及した。[26] またモースは一八八四年九月四日から一一日まで、フィラデルフィアで開かれた米国科学振興協会（The American Association for the Advancement of Science）の第三三次年例会議において朝鮮の風俗を紹介し、[27] 一八八五年一月には類似した内容でボストン自然史協会（Boston Society of Natural History）でも発表をした。[28] モースの発表は、厳格な父子関係と徹底した長子相続、「五倫（Five Rules）」から始まって儒教経典と歴史等を教える教育制度、さらにアジアの他の民族とは異なり箸ではなく匙を使う食生活文化に至るまで、幅広いテーマにわたっていた。[29] 朝鮮に行ったことのないモースが、そのように具体的な人類学的研究を発表することができたのは、兪吉濬の助けがあったからである。日本留学時代に卓越した語学能力をみせた兪吉濬は、今回

もわずか一〇か月で、自身のアメリカ人師匠に朝鮮の多様な文化を紹介していた。

このように、モースにとって兪吉濬は「隠遁の王国（Hermit Kingdom）」と知られていた朝鮮を、最も正確に紹介することができる情報源であると同時に、アジアの異質的文化を案内するアドバイザーでもあった。例えばモースは、日本において家屋の蓋（roof）を屋根（yane）と呼ぶことが理解できなかった。字意的には家屋の根（house-root）を意味する単語が、どうして「屋根（roof）」を意味するのかが納得できなかったのである。この時モースは隣にいた「朝鮮人の友達（a Korean friend）」から、説得力のある意見を聞くことができた。その「友達」は、木に根がないと枯れてしまうように家屋も屋根がないと腐ってしまうため、日本では家屋の蓋を「家屋の根」、つまり「屋根」と呼ぶのだと説明した。[30] もちろん、モースにこのような説明ができた「朝鮮人の友達」は兪吉濬以外にいなかった。

兪吉濬はモースといた最初の一〇か月間英語学習に力を尽くしたが、この期間は単なる語学研修だけでなく、彼との知的交流の時間でもあった。モースが兪吉濬に学問の手順と科学（理術）について教えたなら、[31] 兪吉濬は彼に朝鮮について信頼できるような知識と情報を提供した。モースは自身が書いていたエッセイの進行状況を兪吉濬に知らせたし、兪吉濬もモースのもとを離れた後、彼の研究を手伝えないことについて申し訳ない気持ちを伝えた。[32] 兪吉濬は留学生活の間一貫して自身の「師匠」への尊敬の気持ちを示したが、二人の関係は一方的な師弟関係ではなかった。兪吉濬自身が話したように、彼はモースの「真の友達（sincere friend）」であった。[33] 兪吉濬とモースの知的交流は、両国の知識人間に行われた最初の学問的疎通であったと言える。一〇か月前にはローウェルと宮岡恒次郎の通訳に頼っていた兪吉濬の英語力は、モースと学問的意見のやりとりができるほどにまで速くに成長していた。兪吉濬が十分な英語能力を備えたと判断したモースは、ついに大学

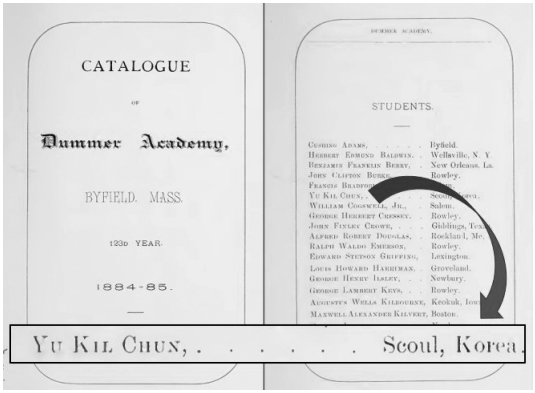
進学のための第二段階として、高等学校過程にあたるダンマーアカデミーへの入学を周旋した。

三　ダンマーアカデミー入学とハーバード進学準備

マサチューセッツ州エセックス・カウンティ（Essex County）のサウス・バイフィールド（South Byfield）にあるダンマーアカデミーは、一七六三年に設立されたアメリカ東部の名門校で、主にハーバード大学進学を目指す学生たちが入学する六年課程の中等教育機関である。福沢諭吉の婿養子であった福沢桃介（一八六八～一九三八）や、明治から大正期に法学者であった福岡秀猪（一八七一～一九三二）等が大学入学を準備した学校も、ダンマーアカデミーである。[34] ダンマーの学事日程は毎年九月初めに始まって翌年六月末に終わり、毎学年は三学期で構成されていた。兪吉濬は留学を始めてから一〇か月後の一八八四年九月、つまり一八八四～八五学年度の第一学期にダンマーに入学した（〈図1〉参照）。[35] 兪吉濬が何学年に入学したのかは定かではないが、入学直後に三年生の科目として開設された「自然地理（Physical Geography）」を受講していたことから、六年課程の中三年生として編入したと考えられる。彼が入学した際にダンマーの在学生は総計四〇名で、兪吉濬はこの中で唯一の東洋人であった。

ダンマーには校長のパーキンス（John Wright Perkins）のほか、G・タウン（George Warren Towne）とウッドベリー（Arthur Henry Woodbury）、R・タウン（Rosa H. Towne）とバチェルダー（John Bachelder）等総計五名の教師が勤務していた。[36] この中でR・タウンと音楽教師であったバチェルダーを除く三人の教師たちは、皆ハーバード大学を卒業しており、パーキンス校長は一八六五年ハーバードを卒業した後一八七一年同大学で

修士学位（A. M.）を取得し、[37] G・タウンとウッドベリーもそれぞれ一八八二年と一八八三年にハーバードを卒業した若き教師たちであった。[38] この中でG・タウンは、大学を卒業した後も大学院に通いながら数学と物理学を勉強した。[39] 自身を数学教師であると紹介した彼は、ダンマーでも算数と代数学、幾何学などを担当したと考えられる。[40] ウッドベリーは、兪吉濬の最初の英語教師であったマチャドと高等学校が同窓であったが、[41] ハーバード卒業の際に英語とギリシャ語科目で優等生（honorable mention at graduation）に選ばれたことから、[42] ダンマーでは英語と古典の授業を担当したと考えられる。ただ、当時アメリカの高等学校では一人の教師が複数の科目を教えており、学校の運営を担当する校長も個別教科目講義を担当するのが一般的であったため、[43] パーキンス校長を含むダンマーの教師たちもアメリカの高等学校の主要な教科であった英語と数学を教えながら、二、三の科目を追加で担当したと考えられる。


CATALOGUE
OF
Dummer Academy,
BYFIELD, MASS.
123d YEAR.
1884-85.

DUMMER ACADEMY.
STUDENTS.
Cushing Adams, ... Byfield.
Herbert Edmund Baldwin, . Wellsville, N. Y.
Benjamin Franklin Berry, . New Orleans, La.
John Clifton Burns, . . . Rowley.
Francis Bradford [illegible]
Yu Kil Chun, ... Seoul, Corea.
William Cogswell, Jr., . Salem.
George Herbert Chenery, . Rowley.
John Finley Crowe, . . . Gibblings, Tex.
Alfred Robert Douglas, . Rockland, Me.
Ralph Waldo Emerson, . . Rowley.
Edward Stevens Griffiss, . Lexington.
Louis Howard Harriman, . Groveland.
George Henry Ilsley, . . Newbury.
George Lambert Keys, . . Rowley.
Augustus Wells Kilbourne, Keokuk, Iowa.
Maxwell Alexander Kilvert, Boston.

Yu Kil Chun, ... Seoul, Korea.

〈図 1〉兪吉濬のダンマー入学記録と入学当時の学校全景

では兪吉濬はダンマーでどのよ

〈表 1〉ダンマーアカデミーの教育課程表

学年	教科目
一学年（First Year）	算数（Arithmetic）、英語（English）、地理学入門（Modern Geography）、リーディング（Reading）、綴り字（Spelling）、ライティング（Writing）
二学年（Second Year）	算数、英語、歴史（History）、リーディング、綴り字、ライティング
三学年（Third Year）	ラテン語（Latin）、代数学（Algebra）、自然地理（Physical Geography）、フランス語（French）、リーディング、綴り字、ライティング、簿記（Book-Keeping）、英語講読（Reading of English Authors）、英語作文（Writing Themes）
四学年（Fourth Year）	ラテン語、ギリシャ語（Greek）、代数学（Algebra first six months）、幾何学（Geometry）、フランス語、英語講読、英語作文、政治経済（Political Economy）
五学年（Fifth Year）	ラテン語、ギリシャ語、代数学と算数復習（Review of Algebra and Arithmetic）、物理学（Physics）、英語講読、英語作文
六学年（Sixth Year）	ラテン語、ギリシャ語、立体幾何学（Solid Geometry）、三角法（Trigonometry）、復習（Reviews）

うな科目を学んだのか。当時ダンマーの教育課程において、最も比重が大きかったのはやはり英語と数学であった（〈表1〉参照）。英語と数学は、六年間続けて履修しなければならない科目であった。ダンマーのカリキュラムにはこの二科目以外に歴史と地理、政治経済と物理等が含まれており、学年が上がるにつれてハーバードで要求されるラテン語とギリシャ語能力を高めるために、集中的に古典の授業が開設された。

兪吉濬が在学していた一八八〇年代半ば、ダンマーでどのような教科書が使われていたのかは明らかになっていない。しかしダンマーの「要覧（Catalogue）」に収録された一八七〇年代後半の教科書から、兪吉濬が参考にした教科書の大まかな輪郭を推定することができる。一八七八～七九学年度にダンマーではグリーン（Samuel S. Greene）の英語文法書とコリア（William F. Collier）の *Collier's History of English Literature*、トレンチ（Richard C. Trench）の *On the Study of Words*、ロビンソン（Horatio N. Robinson）の *New Elementary Algebra*、アンダー

ソン（John J. Anderson）の *A Manual of General History*、そしてウォーレン（David M. Warren）の *An Elementary Treatise on Physical Geography* 等を教科書として使用していた。[44]

兪吉濬はダンマー入学時に二九歳だった。[45] 数学教師タウン（一八五八年生）より二歳年上で、英語教師ウッドベリー（一八五九年生）より三歳も年長者であった彼が、ダンマーに長く通うつもりはなかったであろう。兪吉濬にとってダンマーは大学入学のための準備過程であり、アメリカ留学の最終目的ではなかった。ダンマーに入学した最初の日本人で、兪吉濬と同時期に大学進学を準備した福沢桃介もダンマーに在学した期間は四か月程であった。[46] 兪吉濬も彼のようにできる限り早く大学入学に必要な資格を備えようとしたのであろう。

兪吉濬が希望した大学はハーバードであったと考えられる。彼は、ボストンがアメリカの教育と学問の中心地であることをよく知っていた。[47] 留学生活を指導してくれたモースと、彼を紹介したローウェルも皆ハーバードを卒業し、パーキンス校長とダンマーの教師たち、さらに留学生活初期に英語を教えてくれた個人教師マチャドもハーバード出身であった。何より、彼が入学したダンマーアカデミーが大学入学を準備する予備校（preparatory school）の性格を持ち、学校運営の主な目標をハーバードが求める入学条件を満たすことにしていたため、[48] 留学生活が持続されていたら、彼もハーバードに進学した可能性が高い。

しかし、ハーバード入学の夢は叶うことがなかった。兪吉濬がダンマーに入学してから三か月後、甲申政変が勃発したからである。朝鮮政府は兪吉濬がアメリカ留学を始めた頃に一〇〇〇ドルを支援したが、[49] 甲申政変以後学費支援は全面的に中断された。既に一八八五年初め、兪吉濬は経済的な困窮を吐露していた。[50] 彼は年間四五〇ドル[51]のダンマーの学費を払うことも困難な状況であったように見える。ローウェルの助けを受けて留学生活を続けていた[52]兪吉濬は、結局大学進学をあきらめて帰国を決心した。

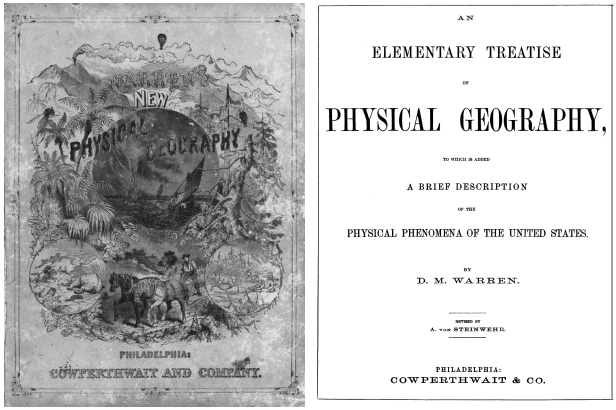
ただ、彼がいつまでダンマーに在学したかは不明である。既存の研究では、兪吉濬が帰国の途についたのが一八八五年秋であったことから、彼はダンマーの第三学年課程を全て履修したと推定されていた。[53] 一八八五年三月末以降彼の行跡が明らかになっていないにも拘わらず、先行研究がダンマーでの在学期間を一年と把握した理由は、兪吉濬がモースに二番目の学期の終了を手紙で知らせたからである。しかしダンマーの一年課程は春と秋の二学期ではなく三学期で構成されていた。兪吉濬が入学した一八八四～八五学年度の場合、一学期は一八八四年九月～一二月、二学期は一八八五年一月～三月、三学期は一八八五年四月～六月までであった。[54] つまり、二番目の学期が終わったという兪吉濬の言及は、一八八五年三月末までの行跡を示すだけで、三学年課程を履修した根拠にはならない。むしろ兪吉濬は一八八五年三月末、今学期が終わると本を持ってセイラムに帰るという趣旨をモースに伝えていた。[55] ダンマーの位置したサウス・バイフィールドから送った手紙が一八八五年三月末を最後に、それ以降発見されなかったのもそのためである。「亡命」と「帰国」の分かれ道に立った兪吉濬は、二番目の学期が終わった後モースのいるセイラムに帰ったと考えられる。結局、満二年に達する兪吉濬のアメリカ滞在中、正規教育課程に在学した期間は七か月程であった。

甲申政変を起こした勢力との連累の可能性を疑われる状況下で留学を続けることは、政治的にも非常に危険であった。おそらく、彼はダンマーを去った後モースの所にいながら、朝鮮政府の政治的動きを機敏に見つめながら、朝鮮に帰る方法を摸索したのであろう。結局彼は朝鮮政府の召還命令が到着すると、一八八五年の秋に帰国の途についた。[56] 彼は大学に入学して十分な知識を習得することができなかった心残りを抱いたまま、[57] ロンドンに渡り長崎に向かうデンビシャー号（Denbeighshire）に身をよせた。二年前に太平洋を渡ってアメリカに到着した彼は、大西洋とインド洋を経て帰国し、閔泳翊一行に次いで朝鮮で二番目に世界を一周した。彼が

太平洋横断路線に比べて時間がかかる帰国経路を選択したのは、より広く世界を見聞したいという望みがあったからであろう。ただ、彼は既に知られていたのとは異なり、帰国の途中でヨーロッパを旅行することはできなかった。兪吉濬は朝鮮に戻る前にイギリス―フランス―ドイツ―オランダ―ベルギー―ポルトガルを経て、数か月間ヨーロッパを旅したと知られてきたが、[58] 実際には彼は日本行汽船に乗るためにロンドンに一週間滞在したことを除けば、ヨーロッパ大陸を経験することはできなかった。[59] 彼の西洋体験は事実上、留学地であったアメリカだけであった。

四　ダンマーの自然地理教育と地理認識の深化

兪吉濬がダンマーで何を学んだかについて教科目以上の具体的事実は分からないが、最近彼が参考にした教科書の一部が明らかになって、アメリカ留学の内容を把握することができるようになった。[60] すでに確認したように、兪吉濬はダンマーに入学した直後、三学年の課程として開設された「自然地理」授業をとっていた。当時アメリカの高等学校では「歴史」より「地理」を勉強する学生が多かったほど、[61] 「地理」は高等学校のカリキュラムを構成する基本的な教科の一つであった。ダンマーにおいても「歴史」は二学年課程のみで開設されただけであったが「地理」は一学年と三学年、合計二年間履修しなければならない科目であった。学生達は一学年課程で「地理学入門（Modern Geography）」を受講し、三学年に上がってからは「自然地理（Physical Geography）」を学習していた。[62] この中で「自然地理」は地理学の深化課程で、当時中等教育課程における一般的な教科であった。特に一八七〇年にハーバード大学とミシガン大学の入学要件に「自然地理」が含まれた



〈図2〉*Physical Geography* の表紙と扉

ため、[63] 多くの高等学校が教育課程の中で一～二学期間に自然地理の授業を開設していた。例えばアメリカ最高の名門高校と言われるフィリップスアカデミー（Phillips Academy）やフィリップスエクスターアカデミー（The Phillips Exeter Academy）においても自然地理科目を教育課程に含めていた。[64]

兪吉濬は以前日本留学の際に基礎的な地理知識を習得したため、「地理学入門」をとらずにすぐに「自然地理」を受講したと考えられる。彼はこの授業でデイビッド・ウォーレン（David Warren）の *An Elementary Treatise on Physical Geography* という本を教科書として使用していた（〈図2〉参考、以下 *Physical Geography*）。[65] デイビッド・ウォーレンは本来出版人であったが、一八五六年 *A System of Physical Geography* という教科書を著して以来 *Primary Geography* と *Common School Geography*、さらに *Physical Geography* に繋がる段階別の教科書を連続で発表し、地理書の著者として名が広まった。様々な版で出刊された「ウォーレンの地理書（Warren's Geography）」は一九世紀後半アメリカでもっとも広く読まれた地理教科書の一つで、[66] 一八七〇年代ハーバードでは *Physical Geography* を入学試験の参考書籍に採択する

程であった。[67] また彼の本は日本でも数回翻訳されていた。[68]

兪吉濬が読んだ *Physical Geography* は、学年に沿って三段階に構成されたウォーレンの地理書の中で、高等学校（academy, seminary, high school）と大学（college）課程の学生たちのための最高レベルの教科書で、[69] 彼は一八六九年に初版が刊行されたこの本の一八七三年版を参考にしていた。初・中級課程の地理書が大陸と国を基準に世界を区画したのとは違って、*Physical Geography* は地球を陸地（Land）と水圏（Water）、大気（Atmosphere）と有機体（Organic Life）に分け、国別の「地誌」に関する叙述はなく、自然地理だけを紹介した。また叙述方式も単純な地理情報の羅列ではなく、多様な自然現象に関してまず概念を定義し、科学的基準によって対象を分類したのち、当代地理学者たちの最新理論まで紹介する程体系的なものであった。

もちろん、兪吉濬がアメリカ留学以前から様々な地理書を読んで、「世界」に対して空間的感覚を身に着けていたのも事実である。彼は青年時代に朴珪壽の勧めで『海国図志』を読み、[70] 日本留学時代には内田正雄の『輿地誌略』を翻訳した。[71] しかし彼が読んだ地理書は国別地理情報を集大成した「地誌」に近いものであったため、ダンマーで「自然地理」を学習することは非常に新しい体験であった。「ヒマラヤ（Himalaya）」の峰を一つずつ列挙して高さを紹介し、各種海流の運動方向を精密に説明するだけでなく、海中の水深を測定して海底の地形まで把握する *Physical Geography* の自然地理知識は、既存の読書経験では代替できない新しい知識の世界であった。

兪吉濬はダンマーの授業を通して、地形の区分と海流の運動、地震の種類や火山の分布といった自然地理知識を体系的に学習することができた。彼が伝統的な地理学には存在しなかった新しい地理概念を『西遊見聞』において紹介することができたのも、ダンマーで自然地理を学習した結果であった。例をあげれば、彼がサハ

ラ（Sahara）沙漠を紹介する際に言及した「低い水溜りに湿った気運のある」地域はオアシス（oases）を指すものであり、[72]「二〇〇尺」の高さまで跳ね上がるというアイスランドの「熱水」も単純な「温泉」ではなく「間歇泉（geyser）」を意味した。[73]たとえ両概念とも、概念語を造語できずその意味だけを解いて翻訳したものであったとしても、彼は確実に近代的自然地理知識を英語で読み理解していた。もし兪吉濬が *Physical Geography* を参考にしなかったら、地震の種類を説明するために、イェール大学教授であった地質学者デーナ（James D. Dana, 1813–1895）の理論まで紹介することはできなかったはずである。[74]朝鮮の世界地理認識に比べると、多少突出的にも見える『西遊見聞』の自然地理情報は、全て典拠の差異から由来するものであった。

勿論、自然地理学の受容は決して容易ではなかった。驚くほどの外国語能力を見せた兪吉濬にとっても、母国語と系統の違う言語で新しい学問を学習することは、大きな知的挑戦であったからである。『西遊見聞』と *Physical Geography* を比較してみると、文章の主語を間違えて把握したり、単語の意味を間違えて理解しているところがしばしば発見される。また「人類の起源」を説明する際に「a single pair」を単純に「一人」と翻訳したり、[75]「meridian」と「longitude」を区分せずに全て「経度」と翻訳しているように、[76]概略的な意味の伝達に重点をおいた彼の翻訳には精密さが足りなかった。

しかし「言語の障壁」より困難だったのは、全地球を網羅した自然地理学の圧倒的な地理情報を把握する作業であった。自然地理学の受容というのは、既に学習した「地誌」中心の地理知識を言語だけ変えて「再確認」する作業ではなかったため、名前すら見慣れない世界各地の山脈と河川を短期間に把握することは、決して簡単なことではなかった。『西遊見聞』に現れた様々な誤謬と誤訳は、自然地理学という見知らぬ知識を学習しながら、兪吉濬が経験した苦労を具体的に表している。例えば彼はアジアの川を説明する際に、「カンボ

ジア川とイラワディ川はインドにある」[77]と言及している。しかし両川はインドの川ではない。このような誤謬が現れる理由は、兪吉濬が「インドシナ」を指す原文の「Farther India」を「インド」と間違えたからである[78]。同じく、兪吉濬はライン（Rhine）川がスペインの川と合流すると叙述したが[79]、ヨーロッパ大陸を横切るライン川はピレネー山脈越えのスペインに流れるわけではない。彼は、決して一緒にすることのできない二つの地名間の物理的距離を把握することができなかった。『西遊見聞』において西半球の東端と西端を逆に翻訳し、アメリカ大陸を意味する西半球の「東端」がベーリング（Bering）海に面していると説明したり[80]、エジプトのナイル（Nile）川をモロッコの川であると紹介しているように[81]、兪吉濬の自然地理認識には多くの間違いが含まれていた。彼は『西遊見聞』を出版するために数回にわたり原稿を校正しながらも、自身の翻訳が誤訳であることに気づかなかった。兪吉濬にとって近代西洋の自然地理学は、きっと新たに学習しなければならない新知識の世界であったに違いない。

このような地理情報認識の限界にも拘わらず、ダンマーでの地理教育は単純に山脈と河川に関する百科事典的知識の習得に留まらなかった。近代地理学は、人種の区分と「文明の段階」のような西洋の知的パラダイムを紹介する近代知識の「窓」であったからである。日本留学の際、兪吉濬に「人種」と「文明」に関する知識を紹介してくれたのが『輿地誌略』であったように、彼はダンマーでも地理教科書を読みながら西洋の支配的談論を学習した。*Physical Geography* は自然地理を紹介することに多くの紙面を割いたが、同時代の西洋の地理書と同じように「人種」と「文明」に関する論理を含んでいた。ブルーメンバッハ（Blumenbach）の論理を採用して世界の人種を五つに区分している点や、狩猟と漁撈—牧畜—農業に繋がる生存方式の違いによって文明の発展段階を区分づけている点[82]から、*Physical Geography* も一九世紀西洋の典型的な地理教科書の一つで

あったといえる。勿論、*Physical Geography* は文明の「段階」を四つあるいは五つに区分したミッチェル（Mitchell）やコーネル（Cornell）とは違い、人類を「文明（civilized）」と「非文明（uncivilized）」と大まかに分類するだけで、「文明」と「非文明」の間に存在する多様な発展程度の違いは範疇化されていない。しかし「文明」の頂点に位置する人種がコーカシアン（Caucasian）で、それ以外の全ての人種を「非文明」と規定している点は他の地理書と変わらない。*Physical Geography* では、中国と日本もヨーロッパとアメリカのキリスト教文明に比べるとはるかに劣る段階と評価されていた。[83] クレイグ（Craig）の指摘のように、人類の歴史が「野蛮」から「文明」に向かうという見解は一九世紀アメリカ中等教育の標準的認識で、[84] 兪吉濬もダンマーの地理教育を通じて、簡明にまとめられていた西洋の文明論を学習していた。

兪吉濬がダンマーでアメリカの地理教科書を読み、同時代の西洋の文明論と遭遇したという事実は、『西遊見聞』の「結論」とされている「開化の等級」（一四編）も、日本留学時代に学習した特定の著作に依存したものではないことを表す。兪吉濬の思想に現れる「文明」と「人種」に関する最初の典拠は確かに『輿地誌略』であったが、アメリカ留学時代彼に西洋の文明論を紹介したのはダンマーの地理教科書で、兪吉濬はダンマーの教科書を翻訳して『西遊見聞』の一編と二編を構成した。「開化の等級」は、日本留学を通じて形成された近代的思惟構造がアメリカ留学を経てより細密に構成され、兪吉濬自身の言語で表現されたものであると言える。*Physical Geography* の存在は、兪吉濬の近代的思惟が「重訳」による間接受容では単純化されない重層的受容経路を持っていることを表している。

五　おわりに

一八八三年一一月、二八歳の朝鮮青年兪吉濬は「碧眼の師匠」に会いに、アメリカ東部の小さい町セイラムに向かった。結い上げた髷を切って洋服を着た彼は、ピーボディ科学アカデミーのエドワード・モースに指導を求め、朝鮮最初のアメリカ留学生として二年余りに達する留学生活の一歩を踏み出した。兪吉濬は高等学校を経て大学に繋がる長期間のアメリカ留学を計画していた。そのため彼はハーバード出身のマチャドという人物から英語を学び始め、個人教師を雇い一〇か月程の語学教育を受けた。セイラムでの一〇か月はアメリカの正規教育課程に進学するための準備期間でありながら、モースとの知的交流の時間でもあった。モースと一緒にいる間、彼の英語能力はアメリカ人「師匠」に朝鮮の文化を紹介できる程にまで速くに成長し、とうとう一八八四年九月、兪吉濬はアメリカ東部の名門高等学校ダンマーアカデミーに入学した。

ダンマーアカデミーは六年課程の中等教育機関で、兪吉濬はこの学校の三年に編入した。彼が入学する当時ダンマーでは五人の教師たちが合計四〇名の学生たちを教えていた。ダンマーの教科目は英語と数学、地理、歴史などで構成されており、学年が上がるにつれてハーバード進学に必要なラテン語とギリシャ語授業が集中的に開設された。兪吉濬はアメリカの高校生と同じく、ダンマーの授業を通じてハーバード進学を目指していたと考えられる。彼の留学生活を導いてくれたモースとローウェル、それからダンマーの教師たちのほとんどがハーバード出身で、ダンマーもハーバード進学を最優先目標と設定していた予備校であったため、留学生活が続いたら兪吉濬もハーバードに進学した可能性が高い。

ダンマーの教育内容は兪吉濬が参考にした教科書を通して推定することができる。彼はダンマーに入学した直後、三年の課程として開設された自然地理科目を受講し、デイビッド・ウォーレンの *Physical Geography* を教科書として使用した。ウォーレンの本は国ごとの「地誌」に関する言及がなく自然地理だけを紹介する深化課程の教科書で、アメリカで最も広く使われる地理書の一つであった。兪吉濬は *Physical Geography* を通じて地形の区分と海流の運動、地震の種類や火山の分布等、自然地理知識を学習することができた。また *Physical Geography* で学んだ内容は、兪吉濬の翻訳を経て『西遊見聞』の一編と二編に収録された。『西遊見聞』が同時代の朝鮮の一般的な地理書とは違って、自然地理に関する体系的な知識を紹介することができたのは、彼がダンマーの地理教科書を翻訳したからであった。

しかしダンマーの地理教育は単純に山脈と河川に関する百科事典的知識を習得することに留まらなかった。近代地理学は人種の区分と「文明の段階」のような西洋の知的パラダイムを紹介する近代知識の「窓」であったからである。兪吉濬は、日本留学時代に『輿地誌略』を読んで「人種」と「文明」の論理を学習したのと同じように、ダンマーにおいてもウォーレンの *Physical Geography* を通じて同じ論理と向き合った。ミッチェルとコーネルの地理教科書が福沢諭吉の初期思想に直接的影響を与えたように、ダンマーの地理教科書も兪吉濬にブルーメンバッハの人種論や「文明」と「野蛮」で位階化された西洋の文明論を紹介した。兪吉濬にとって日本留学を通して形成された近代的思惟構造は、アメリカ留学を経てより細密に構成され、自身の言語で現れたと言える。兪吉濬が参考にしたダンマーアカデミーの地理教科書は、『西遊見聞』に現れる近代的思惟が「重訳」による間接受容の結果として単純化されない、重層的受容経路を持っていることを表している。兪吉濬のアメリカ留学の具体的様相が明らかになり始めた結果を受けて、西洋文明の直接受容に関する実証的研究

がさらに進捗していくことを期待する。

注

（1）李光麟「兪吉濬의　文明観」『韓国近現代史論攷』、一潮閣、一九九九年、八～九頁。国分典子「韓国에서의　西洋法思想　受容과　俞吉濬」『韓日関係史研究』一三、二〇〇〇年、一六三頁。金賢珠「『西遊見聞』의（文明）開化論과　翻訳의　政治学」『国際語文』二四、二〇〇一年。許東賢「一八八〇年代　開化派　인사들의　社会進化論　受容様態　比較研究」『史叢』五五、二〇〇二年、一七九～一八〇頁。張圭植「開港期　開化知識人의　西欧体験과　近代認識」『韓国近現代史研究』二八、二〇〇四年、八頁。

（2）対米外交に基づく一八八〇年代朝鮮の近代化政策については李光麟『韓国開化史研究』、一潮閣、一九九八年参照。

（3）崔德壽『開港과　朝日関係』、高麗大学校出版部、二〇〇四年、三八頁。

（4）兪吉濬の生涯とアメリカ留学に関しては、李光麟『兪吉濬―닫힌　사회에　던진　충격』、東亜日報社、一九九二年。李光麟『韓国開化史研究』、一潮閣、一九九八年。柳永益『甲午更張研究』、一潮閣、一九九〇年。韓哲昊「兪吉濬의　生涯와　思想」『韓日関係史研究』一三、二〇〇〇年。鄭容和『文明의　政治思想』、文学과　知性社、二〇〇四年を参照。

（5）徐明一「『西遊見聞』一～二編의　典拠와　兪吉濬의　世界地理　認識」『歴史와　現実』一一四、二〇一九年。

（6）報聘使に関しては金源模『韓美修交史』、哲学과　現実社、一九九九年を参照。ただ、金源模の研究等初期の研究は報聘使の活動を把握するための一次史料として『西遊見聞』を活用しているが、『西遊見聞』に現れるアメリカの都市紹介は見聞記録ではなかった。西洋の主要都市に関する『西遊見聞』の叙述は、ほとんどが青木恒三郎（一八六三～一九二六）が編纂した『世界旅行　萬国名所図絵』という日本の旅行案内書を翻訳した内容であった（徐明一「『西遊見聞』一九～二〇編의　典拠와　兪吉濬의　翻訳」『韓国史学報』六八、二〇一七年を参照）。従って、『西遊

見聞』を根拠に兪吉濬の行跡を把握する際には注意を要する。

（7）『西遊見聞』「序」、三頁。以下『西遊見聞』の頁数は『兪吉濬全書』ではなく、原著の頁数に従う。

（8）邊燧のアメリカ留学に関しては李光麟『韓国開化史의　諸問題』、一潮閣、一九八六年、八三頁を参照。

（9）鄭容和『文明의　政治思想』、文学과　知性社、二〇〇四年、七五頁。

（10）『西遊見聞』「序」、三頁。

（11）李光麟『兪吉濬―닫힌　사회에　던진　충격』、東亜日報社、一九九二年、四〇頁。

（12）*National Republican* 1883. 10. 09. A CHAT WITH A COREAN: "I do not weep for Chosun now, for I am studying America. But when I shall have finished my study, I shall laugh to see Chosun again."

（13）*The Evening Star* 1883. 10. 15. THE COREAN EMBASSY; *Harrisburg Daily Independent* 1883. 10. 16. YEN-KIL-CHUN [sic]; *The Baltimore Sun* 1883. 10. 16. Washington Notes; *The Daily Journal* 1883. 10. 19. GENERAL NEWS; 兪吉濬のアメリカ留学を表す最も早い時期の史料は *The New York Times* 1883. 11. 08. COREANS PREPARING TO GO HOME であると知られているが、彼の留学は既に一八八三年一〇月初めから様々なメディアを通して報道されていた。

（14）金鳳珍は、兪吉濬が報聘使使行中の一八八三年九月末、自身の留学を相談するためにモースを訪ねたと推定している（金鳳珍「E・Sモースと遣米報聘使、兪吉濬の滞米・留学」『社会システム研究』三、二〇〇五年、九九～一〇〇頁）。

（15）*New York Tribune* 1883. 11. 08. VISITING COREANS AND THEIR PLANS; *Chicago Tribune* 1883. 11.08. THE COREAN EMBASSY

（16）*The Evening Star* 1883. 11. 06. DEPARTURE OF THE COREAN EMBASSY; *The New York Times* 1883. 11. 16. COREANS SEEING THE SIGHTS

（17）*The Boston Globe* 1883. 11. 09. One of the Coreans to Study at Salem

(18) "Intelligence from American Scientific Stations", *Science*, Vol. 3, No. 60, 1884, p. 393. *Annual Reports of the Trustees of the Peabody Academy of Science 1874 to 1884*, p. 50.

(19) *National Republican* 1883. 10. 08 A CHAT WITH A COREAN

(20) 李光麟、前掲、四〇頁。

(21) 金鳳珍、前掲、一〇九頁。

(22) *Secretary's Report* [*Harvard College Class of 1883*], No. 2, 1886, p. 53. *Records of the Class 1883–1908* [*Harvard College Class of 1883*], 1908, pp. 91–92.

(23) 金鳳珍は、モースの個人秘書であったマーガレット・ブルックスと彼女の家族が兪吉濬に英語を教えた家庭教師であったと推論した（金鳳珍、前掲、一一〇頁）。

(24) *Annual Reports of the Trustees of the Peabody Academy of Science 1874 to 1884*, pp. 61–63.

(25) Edward S. Morse, *Japanese Homes and Their Surroundings*, Peabody Academy of Science, 1886, p. x.

(26) Edward S. Morse, "Korean Curios", *Science*, Vol. 4, No. 85, 1884, p. 270. "I am indebted to one of the Korean embassy, Mr. Yu, who has been with me constantly for several months, and who now speaks very good English."

(27) "Proceedings of Scientific Societies", *The American Naturalist*, Vol. 18, No. 11, 1884, p. 1185. モースが米国科学振興協会年例会議の人類学分科（Section H-Anthropology）に提出した発表文のタイトルは'Interviews with a Korean'であった。発表文の概要は "Proceedings of the section of Anthropology", *Science*, Vol. 4, No. 87, 1884, p. 345 で確認できる。米国科学振興協会で発刊した公式抄録は *Proceedings of the American Association for the Advancement of Science*（*Thirty-third Meeting*）, The Salem Press, 1885, p. 605 に収録されている。ただ、両要約文とも分量が非常に短いため、モースの発表内容を把握するには限界がある。

(28) "Proceedings of Scientific Societies", *The American Naturalist*, Vol. 19, No. 3, 1885, p. 335.

(29) *The Emporia Weekly News* 1884. 10. 23. Life in Corea; *The People's Press* 1884. 11. 07. Life among the Coreans; モースが米国科学振興協会で発表した'Interviews with a Korean'の内容は当時新聞報道で比較的に詳細に把握することができる。

(30) Edward S. Morse, *Japanese Homes and Their Surroundings*, Peabody Academy of Science, 1886. p. 107.

(31) 『西遊見聞』「序」、三頁。

(32) Peabody Essex Museum, *Yu Kil-Chun（1856–1914）and the Korean Collection at PEM*, Peabody Essex Museum, 2007, p. 20. "I am very glad that you are well and keeping your work on important essays and drawings. I am really very sorry to be away from you, but cannot help it, for it is my duty to do so." ここで言及されているモースの'important essays'とは朝鮮に関する人類学的研究と推定される。兪吉濬はダンマー入学をきっかけにセイラムを去った以後、以前のようにモースの研究の役に立てないことについて、申し訳ない気持ちを表したのである。

(33) Peabody Essex Museum, *Yu Kil-Chun（1856–1914）and the Korean Collection at PEM*, Peabody Essex Museum, 2007, p.18.

(34) *Catalogue of Dummer Academy 1887–1888*; 二人は兪吉濬の後一八八七年ダンマーに入学した。

(35) *Catalogue of Dummer Academy 1884–85*; ダンマーアカデミーの「要覧」にあたるこの資料は一〇頁程のパンフレットで、ページ数が明記されていない。

(36) *Catalogue of Dummer Academy 1884–85*

(37) パーキンス校長は一八八二年ダンマーに赴任して一八九四年まで校長として在職し、一八九四年セイラムの教育監（superintendent）に選出された。パーキンス校長の履歴に関しては *Eighth Report of the Secretary of the Class of 1865 of Harvard College*, 1895, p. 30 と John Williams Ragle, *Governor Dummer Academy History 1763–1963*, Governor Dummer Academy, 1963, pp. 80–81 を参考。

(38) *Harvard College Secretary's Report* [*Class of 1882*] III, 1890, p. 74.; *Class of 1883 Harvard College Thirtieth Anniversary 1883–1913 Sixth Report*, p. 205.

(39) *Harvard College Secretary's Report* [*Class of 1882*] IV, p. 65.

(40) G・タウンはダンマーを辞めた後もセイラムで数学教師として経歴を続けた。

(41) *Class of 1883 Harvard College Thirtieth Anniversary 1883–1913 Sixth Report*, p. 205.

(42) *Harvard University Catalogue 1883–84*, p. 109.; *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College 1882–83*, p. 159.

(43) William J. Reese, *The Origins of the American High School*, Yale University Press, 1995, p. 32, p. 129.

(44) *Catalogue of the Trustees, Instructors and Students of Dummer Academy 1876–78*, pp. 9–15.

(45) 兪吉濬の歳は朝鮮慣習に従って数え歳とした。

(46) 『福沢桃介翁伝』、福沢桃介翁伝記編纂所、一九三九年、七八頁。

(47) 『西遊見聞』、五〇二頁。

(48) *Catalogue of Dummer Academy 1884–85*: "The primary object of the school is to prepare boys for college, with special reference to the requirements for admission to Harvard University"

(49) 李光麟『韓国開化史研究』、一潮閣、一九九九年、三一六頁。

(50) 李光麟「兪吉濬의　英文書翰」『東亜研究』一四、一九八八年、一四頁。Peabody Essex Museum, *Yu Kil-Chun* (*1856–1914*) *and the Korean Collection at PEM*, Peabody Essex Museum, 2007, p. 42.

(51) *Catalogue of Dummer Academy 1884–85*

(52) Samuel Hawley, *America's man in Korea: the private letters of George C. Foulk, 1884–1887*, Lexington Books, 2008, p. 125.

(53) 柳永益「『西遊見聞』論」『韓国史　市民講座』七、一九九〇年、一三五頁。李光麟『兪吉濬―닫힌　사회에　던진　충격』、東亞日報社、一九九二年、五二頁。鄭容和『文明의　政治思想』、文学과　知性社、二〇〇四年、八〇頁。韓哲昊「兪吉濬의　生涯와　思想」『韓日関係史研究』一三、二〇〇〇年、七頁。

(54) *Catalogue of Dummer Academy 1883–84*

(55) Peabody Essex Museum, *Yu Kil-Chun（1856–1914）and the Korean Collection at PEM*, Peabody Essex Museum, 2007, p. 44. “This term of this school is going to be closed next week Wednesday. So I shall come home at that time and bring my books”

(56) 柳永益『甲午更張研究』、一潮閣、一九九〇年、九八～九九頁。

(57) Peabody Essex Museum, *Yu Kil-Chun（1856–1914）and the Korean Collection at PEM*, Peabody Essex Museum, 2007, p. 52. “I am exceedingly sorry that I am not able to have the pleasure of seeing your family on my departure, and that I leave the land of the free and the home of the brave with my immature knowledge.”

(58) 李光麟、前掲、五五頁。

(59) 兪吉濬の帰国旅程に関する再検討は徐明一「『西遊見聞』一九～二〇編의　典拠와　兪吉濬의　翻訳」『韓国史学報』六八、二〇一七年、一〇八～一一〇頁を参照。

(60) 以下の内容は筆者が最近発表した「『西遊見聞』一～二編의　典拠와　兪吉濬의　世界地理　認識」『歴史와　現実』一一四、二〇一九年の内容一部を要約したものである。

(61) Susan Schulten, *The Geographical Imagination in America 1880–1950*, University of Chicago Press, 2001, pp. 93–94.

(62) *Catalogue of Dummer Academy 1884–85*

(63) Sidney Rosen, “A Short History of High School Geography（to 1936）”, *The Journal of Geography*, Vol. 56, No. 9, 1957, p. 408.

(64) *Catalogue of Phillips Academy 1884*, p. 24.; Frank Herbert Cunningham, *Familiar Sketches of the Phillips Exeter Academy and Surroundings*, J. R. Osgood, 1883, p. 308.

(65) *Physical Geography* の正確な書誌事項は次のようである。D. M. Warren, *An Elementary Treatise on Physical Geography: To which is added a brief description of the physical phenomena of the United States*, Cowperthwait & Co., 1869 Geographers, Vol. 14, No. 3.

(66) Charles Redway Dryer, "A Century of Geographic Education in the United States" *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 14, No. 3, 1924, p. 119; William Leonard Mayo, *The Development and Status of Secondary School Geography in the United States and Canada*, University Publishers, 1965, p. 13; Geoffrey J. Martin, *American Geography and Geographers*, Oxford University Press, 2015, pp. 74–76.

(67) *Harvard University Catalogue 1875–1876*, p. 41.

(68) 日本では *Physical Geography* が松本駒次郎の翻訳を通して『格物地誌』という題目で出版され、一八七九年にはウォーレンの違う地理書が『地理論略』という題目で紹介された。『地理論略』の原書は *Physical Geography* と知られてきた（日本地学史編纂委員会、「西洋地学の導入（明治元年～明治二四年）」『地学雑誌』一〇二―七、一九九三、八八四頁）。しかし筆者の確認によると、『地理論略』は *Physical Geography* ではなくウォーレンの初期作である *A System of Physical Geography* を翻訳した本である。

(69) *Physical Geography*, p. 3. "Publishers' Advertisement"

(70) 金允植「矩堂詩鈔序」『矩堂詩鈔』、一頁。

(71) 朴漢珉「兪吉濬『世界大勢論』의 典拠와 著述의 性格」『近代 韓国의 改革構想과 兪吉濬』、高麗大学校出版文化院、二〇一五年、八一～九二頁。

(72) 『西遊見聞』、三〇頁、「間間히 低下한 窪處에 水濕한 氣가 有하야」。*Physical Geography*, p. 27.

（73）『西遊見聞』、一二頁。*Physical Geography*, p. 31.

（74）『西遊見聞』、一一頁。*Physical Geography*, p. 32.; 兪吉濬が紹介した「学士丹我」は、アメリカの地質学者ジェームス・デーナを指す。

（75）『西遊見聞』、六三頁。*Physical Geography*, p. 86.

（76）『西遊見聞』、四三頁。*Physical Geography*, p. 43.

（77）『西遊見聞』、五五頁。

（78）*Physical Geography*, p.41.

（79）『西遊見聞』、五六頁。

（80）『西遊見聞』、一三頁。*Physical Geography*, p. 15.

（81）『西遊見聞』、五六頁。*Physical Geography*, p. 39.

（82）*Physical Geography*, pp. 86–92.

（83）*Physical Geography*, p. 92.

（84）アルバート　M・クレイグ著・足立康、梅津順一訳『文明と啓蒙――初期福沢諭吉の思想』、慶應義塾大学出版会、二〇〇九年、五四頁。